

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン演奏会

二重合唱 の夕べ

'89 4月24日(月)

午後7時開演

岩手県民会館大ホール

●ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

代表 木村 吉彦

本日は、お忙しい中ようこそおいでくださいました。

私たちカンタータ・フェラインは、85年の「ヨハネ受難曲」以来団員数の順調な増加を見ております。その結果、本日のような二重合唱のみを集めた演奏会ができるようになりました。練習の過程においてはきびしいものがありましたが、御来場の皆様に二重合唱の醍醐味を満喫していただければ幸いです。以前でしたら、毎年のように大ホールをもちいて演奏会を開くなどとは考えもつかなかった私たちです。これも、ひとえに皆様の応援のおかげです。あらためて感謝いたします。

発足以来12年、時は移り、人は変わったかもしれませんが、変わらないものがあります。それは、私たちのめざすものです。私たちカンタータ・フェラインは、いつも「文化」を生み出す団体でありたいと思っています。文化とはなんでしょうか。私は、「感動の共有」だと考えています。たとえば、演奏会において、演奏者である私たちと聴衆である皆さんとが感動という共通の体験を持つ、そういう時間と場所を持つことが文化だと思うのです。これまでも、そういう思いのもとに活動してまいりました。これからもこの思いを大切にしていきたいと思います。

来年末には、第2回のドイツ演奏旅行を予定しております。それに先立って来年(90年)3月11日(日)には、この大ホールにおきましてバッハの「クリスマス・オラトリオ」を演奏する企画も進んでおります。私たちがほんとうの「文化」団体であるために、これからも皆様方の暖かくも厳しい御指導・御批判を戴きたいと思います。

最後に、佐々木先生をはじめ、全国各地からおいでくださったオーケストラの皆さん、後援をいただきました団体の皆様へ感謝いたしまして、ごあいさついたします。

主催／盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後援／岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・(株)岩手日報社・

NHK盛岡放送局・岩手放送(株)・テレビ岩手(株)・エフエム岩手(株)

●プログラム

G・GABRIELI

ジョヴァンニ・ガブリエーリ

- Sonata pian'e forte

ピアノとフォルテのソナタ

- Canzon à 12

12声のカンツォーナ

G・GABRIELI/DREI MOTETTEN

ジョヴァンニ・ガブリエーリ/3つのモテット

- O DOMINE JESU CHRISTE < Passionsmotette >

おお、主なるイエス・キリストよ < 受難のモテット >

- HODIE COMPLETI SUNT < Zum Pfingstfest >

今日、御言葉が成就した < 聖霊降臨節のために >

- O JESU MI DULCISIME < Zu Weihnachten >

おお、やさしき私のイエスよ < クリスマスのために >

H・SCHÜTZ/MAGNIFICAT SWV468

ハインリッヒ・シュッツ/マグニフィカト SWV468

休憩

J・S・BACH/MOTETTEN

ヨハン・セバスティアン・バッハ/モテット

II. Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf

聖霊は弱い私達を助けてくださる

V. Komm, Jesu, komm

来てください、イエスよ

指揮●佐々木正利

コンサート・マスター●蒲生克郷

オルガン●鈴木雅明

合奏●東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

合唱●盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

●演奏会によせて——「フェライン ノット」

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

常任指揮者 佐々木 正利

フェライン(Verein)とは、ドイツ語で“協会”という意味である。これに従えば、我が盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは盛岡バッハ・カンタータ協会と訳されることになるのであろうが、かの有名なウィーン・ムジーク・フェラインが、我が国ではウィーン楽友協会と“友”を入れて呼ばれていることからわかるように、フェラインがもつ本来的な意味合い、つまり《友好的な集まり》《仲間》といった意識で我々はこの名を使っている。すなわち、盛岡のバッハ好きの仲間たちが、その本質をもっともよく表わしている“カンタータ”という合唱曲を、楽しみながら勉強するグループ、ということになろうか。従って我々の活動の成果を発表する演奏会も、それを第一義的な目的として捉えるのではなく、我々にとってより重要なのは、普段の練習における、音楽をひも解く喜びと創造の学びに他ならない。合唱好き、バッハ好きの仲間が集まって音楽を楽しむだけが目的だから、対外的なものに何一つ規制されることなく、のびのび音楽できる利点がここにはある。練習も週一回というのんびりペース、集う仲間は老若男女様々であり、それぞれ立場も思い入れも違っていながら、ひたすらバッハとの触れ合いを喜ぶ熱心さでつながっているといっても過言ではない。

我々には二つのモットーがある。一つは、できる者ができない者を助く、ということ、今一つは、練習終了5分前にでも駆けつけてきた仲間に、心からの拍手を送る、ということである。前者においては、音楽的能力にとどまらず時間的なことも含めて、活動の屋台骨を支えるものとして、とても大事にしたいと皆が思っているし、後者においては、ただただその熱意に敬意を表するのみである。こうした団員を本当に大切にすることこそ、真のフェライン精神なのだ。

思えば、今を去る12年前、20名にも満たぬ小人数で産声をあげたフェラインも、バッハという小川(ドイツ語でBachは“小川”の意)ならぬ大海の魅力に、ひたすら触発され続けて今を生きている。その間、東京芸大のバッハ・カンタータ・クラブに何べんとなくお世話になり、又、我が師小林道夫に尊い教えを受

けながら、数々の足跡を残せるようにまでなった。3年前には、第一回目の西ドイツ演奏旅行を行ない、現地の新聞にて過大な評価を丁戴する光栄を拝し、これも又、一つの励みとなった。我々のバッハが、シュッツが、本家本元であるドイツ人の心に伝わったことが、とても嬉しいこととして強く心に焼きついている。彼らからみれば、地球の東の果ての(欧米の地図は大西洋を中心として描かれている)仏教国から来た人々が、バッハをドイツ語で歌うこと自体驚きであったはずだが、このことは、バッハの音楽が世界共通の言語になっていることを証し示すものとして、ひそかに、彼らにとっても誇りになったことと思っている。

我々が取り上げる作曲家は、本日のプログラムでもおわかりのとおり、バッハ一辺倒ではない。何故ならば、あくまでバッハを中心に据えることを基本精神として、バッハが影響を受けた作曲家、バッハに影響を受けた作曲家にまで範囲を広げて対象と捉えようとしているからである。この論理でいくと、古今東西ほとんどの作曲家が、我々の学びと喜びの対象となる。

本日取り上げた3人の作曲家の関係は、すべて直接的ではないにしても、師弟関係にあるといってよい。すなわち、北イタリア・ヴェネツィア楽派の楽匠G・ガブリエーリは、サン＝マルコ大聖堂オルガニストとして彼の前任者であった叔父A・ガブリエーリの開発した分割合唱のかけ合い手法による広次元的な効果(模倣やエコー・強弱等)を、ポリフォニーの生動へと止揚(Aufheben)することに成功した作曲家であり、中部ドイツ・ザクセン出身のプロテスタント作曲家シュッツは、当時巨匠として全ヨーロッパに名を馳せた、このG・ガブリエーリのもとに、諸外国から集まった弟子の中でも最大の人物である。彼は師の手法を、ただドイツに伝承するだけでなく、その手法をして、ルター訳のドイツ語聖書の音楽的釈義と表現という彼の生涯使命をいっそう堅固に推し進めたのであった。このシュッツより丁度100年後にこの世に生を受けたバッハは、同じくルター正統派のプロテスタント作曲家として、シュッツの生涯使命を継承発展させるだけでなく、バッハ以後

現在まで通じることになる、驚異的で多様な音楽語法を生み出し、文字通り「音楽の父」と呼ばれるにふさわしい金字塔を打ち建てたのである。ヴェネツィア楽派の初期バロックポリフォニーの技法は、シュッツによって、ドイツ音楽の素材を生かす実り豊かな形成力として働かされ、バッハによって、見事な大輪の花を咲かすことになったのである。本日のプログラムによって、バッハに通じる作曲家たちによる二重合唱の歴史的発展の推移を、多少なりともお感じいただければ幸いである。

カトリックの作曲家ガブリエーリが臨終に際し、プロテスタントの作曲家シュッツに、自分が後生大事にしていた指輪を与えたように、バッハが、尊敬する作曲家シュッツの作品を勉強すべく、遥かなる道程をドレスデンまで求めたように、人間の熱き思いは、国境を越え、宗教を越え、時間を越えて脈々と波打っている。我々にもこの熱き心が必要だ。

お仕着せの言葉で語るのではなく、自らの言葉で、自らの力で作品の心に魂を吹き込んでこそ、その作品は、生き生きと輝きを増す。たとえその語法が間違っている、又勉強しななおせばいい。フェラインの歌声は、常に生を感じさせる生(なま)の音でありたい。人間の感動をストレートに表してこそが、奏でる人と聴く人とを密接に結びつける原動力となることを、本日の演奏会で再び確認できれば、と願っている。そして、それこそがフェラインの目指す音なのだ。フェラインの音はかくありたい、という演奏ができたなら、これに優る喜びはない。

来年には、第二回目の西ドイツ演奏旅行を計画している。このフェラインの音を再びドイツの地において証しすることができた時、先達の作曲家の思いが、真の意味で我が物になるような気がしてならない。

●プロフィール

佐々木正利(指揮)



東京芸術大学音楽科卒業、同大学院修士課程及び博士後期課程終了。音楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸三、角倉一郎の各氏に、作曲を松本民之助に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。芸大在学中より、バロックから現代に亘る宗教作品、特にJ・S・バッハの音楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイヤ公演、定期演奏会をはじめ大学、一般合唱団と多数共演、特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて福音史家として高く評価され以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より19

82年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマー教授に師事、この間同大学定期演奏会で、ドヴォルザーク・レクイエムのテノールソロを務めたのはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールに於るマタイ受難曲においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルグ・ブリュッセルのロ短調ミサでは特に高い評価を得た。帰国後もN響、読響、都響、日フィル、新日フィル、東響の定期演奏会等に出演し、K・マズア、H・シュタイン、H・ブロムシュテット、H・ヴィンシャーマン、H・リリング、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、R・バーガー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルト管弦楽団とバッハ・マニフィカト、モーツァルト戴冠ミサを共演、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファン・トゥッテ・フェランド、フィデリオ・ヤッキノ、スカララッティ・グリセルダ・コッラード等で出演、現在までリサイタル8回、NHK-FMリサイタル4回等歌曲の分野でも活躍。長年に亘り、小林道夫氏のもと東京芸大バッハカンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。1987年にはH・リリング音楽監督のバッハアカデミーにて、テノール・マスタークラス講師を務める。現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。

蒲生 克郷(コンサートマスター)



1976年東京芸術大学卒業。NHK・FM「夕べのリサイタル・新人演奏会」に出演。

1976年～1978年渡独。ヒルデスハイム市立歌劇場管弦楽団に在籍の傍ら、ウェルツブルク音楽大学にて研鑽を積む。また、ヒルデスハイム室内管弦楽団コンサートマスターを務める。帰国後は憩弦楽四重奏団、東京バロック・アンサンブル、東京バッハ・アカデミー等の室内アンサンブルで活躍する一方、芸大バッハ・カンタータ・クラブ、盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、盛岡バッハ・アンサンブルの指揮者を務める。

現在、久合田緑弦楽四重奏団、芸大バッハ・カンタータ・クラブ各メンバー。水戸バッハ・コレギウム常任指揮者。東京芸術大学管弦楽研究部講師。神戸女子学院大学音楽部講師。

故多久興、海野義雄、ボリス・ゴールドシュタインの各氏に師事。

鈴木 雅明(オルガン)



神戸に生まれる。12才より教会のオルガニストを勤め、東京芸術大学作曲科にて、故矢代秋雄に師事。卒業後、同大学大学院オルガン科に於いて、広野嗣雄に師事すると共に、古楽研究会に於いて、チェンバロを鍋島元子に学んだ。さらに1970年より、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマン、オルガンをピート・ケーに師事。同音楽院よりチェンバロとオルガン双方のソリスト・ディプロマを得た。その間、1980年には、ブルージュ国際チェンバロ・コンクール(通奏低音部門)において第2位(1位なし)、1982年には、同オルガンコンクールに第3位入賞を果たした。西ドイツ・デュイスブルグ国立音楽大学講師を経て、現在、松蔭女子学院大学(神戸)、及び、桐朋学園大学(東京)にて教鞭をとっている。松蔭女子学院大学に於いては

特別に音響設計されたチャペルとマルク・ガルニエ製作によるフランス・クラシックオルガンを用いて積極的にコンサートシリーズを企画する他、全国各地でチェンバロ・オルガン奏者及び指揮者として演奏活動を行い、またオランダ・ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパ各地では、毎年コンサート・ツアーを行っている。とくに、オランダ・ハーレムで行われたリサイタルでは「オルガンを知りつくした生気あふれる雄大な演奏…」と紙上で絶賛された。プロテスタント教会音楽の研究も手がけ、特にカルヴァンの詩篇歌の普及に努めている。日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。

東京バッハ・カンタータ・アンサンブル

東京バッハ・カンタータ・アンサンブルは、東京芸術大学の学内サークルとして活動しているバッハ・カンタータ・クラブのOBを中心に、今回の様なバッハの宗教曲等の演奏会の為に編成される室内オーケストラである。母体となっているバッハ・カンタータクラブは、1970年に創立、顧問に服部幸三教授、指導・指揮に小林道夫氏を迎え、現在に至るまで、毎年の定期公演を中心に活発な活動を続けている。また、北海道・東北・東海・関西方面への演奏旅行も行っている。当合唱団とは、バッハ「ヨハネ受難曲」、ヘンデル「メサイア」等、数多く協演し、好評を博す。今回の演奏会に参加したメンバーも各自が、日本のトップオーケストラの首席奏者として、また独奏者やアンサンブルの一員として、各方面で活躍し、その卓越した演奏力と音楽性には、高い評価を得ている。

- Vn 蒲生 克郷 花崎 淳生 ●Vla 李 善銘
- Vc 花崎 薫 ●Kb 蓮池 仁
- Ob 渡辺 尚洋 森 明子 ●Ob da caccia 浦 丈彦
- Fg 寺下 徹 ●Posaunen(トロンボーン) 萩谷 克巳 田中 徹 村岡 淳志
- Org 鈴木 雅明

● 曲目解説および歌詞対訳 (解説: 小原一穂、対訳: 木村吉彦)

I. G. GABRIELI ジョヴァンニ・ガブリエーリ

● Sonata pian'e forte ピアノとフォルテのソナタ

歴史上はじめてダイナミック(強弱)を指定して印刷された作品として知られている。同時に、声部ごとに使用楽器を指定している最古の例でもある。弦楽器群と管楽器群の効果的な対比は、その荘重な響きにおいて音楽都市ヴェネツィアの隆盛ぶりを髣髴とさせる。ガブリエーリの作品がすでにバロック音楽の主要原理である“対比”を用いたコンチェルト様式を予告している点も、彼が音楽史上に果たした役割を知る上で注目したい。

● Conzon à 12 12声のカンツォーナ

カンツォーナの本来の語義は「歌」を指すものだが、15世紀以来のフランスを中心とする世俗曲がその人気の高まりと共に数多くの器楽曲に編曲され、後に器楽形式のカンツォーナを生むことになった。ガブリエーリが残したカンツォーナは、1597年の「サクラ・シンフォニア集」と1615年の「カンツォーナとソナタ集」に収められている。このカンツォーナは、形式的に然程大規模なものではないが、純器楽合奏の響きの美しさと総奏効果の華やかさが楽しめる。

DREI MOTETTEN 3つのモテット

● O DOMINE JESU CHRISTE <Passionsmotette>

おお、主なるイエス・キリストよ <受難のモテット>

受難のモテット。音色効果の傑作といわれ、同時代のヴェネツィア絵画からの影響も指摘される。ヴェネツィア画家(ティツィアーノ、ティントレット、ヴェネローゼ等)達は色彩画家と呼ばれる程、明るく輝かしい色彩感覚をもち濃淡の配合原理を極めた事で知られるが、ガブリエーリのこのモテットも、荘重だが暗い色調を帯びた低音系の第2コーラスと明るい色彩の高音の第1コーラスのコントラストが絶妙に配合されている。バロック的壮麗さを反映した名曲である。

O Domine Jesu Christe, adoro te
in cruce vulneratum.
te deprecor, ut vulnera tua
sint remedium animæ meæ.

おお、主なるイエス・キリストよ、私は、十字架につけられ、
傷つけられ、辱めをうけたあなたを崇めます。
私は、あなたの受難が私の魂を罪より
救ってくださることを望みます。

● HODIE COMPLETI SUNT <Zum Pfingstfest>

今日、御言葉が成就した <聖霊降臨節のために>

聖霊降臨節のためのモテット。聖霊降臨とは五旬節の日にキリストの約束どおり弟子たちに降った聖霊の降臨をいう。「キリスト教大事典」(教文館)に拠れば聖霊という概念は、我々に対する神の働きを説明しようとするものと考えことができ、具体的には聖霊はキリストを信仰者にまで持ち運んでくる神といえる。この曲を特徴づけるものは、言葉の持つ自然なリズムの音楽技法上の優位であり、短かめの自由なフレーズを表出性に富んだものになっている。明快で躍動感溢れる手法といえよう。

Hodie completi sunt dies pentecostes.
Alleluja.
Hodie Spiritus Sanctus in igne
discipulis apparuit et tribuit
eis charismatum dona.
Misit eos in universum mundum,
praedicare et testificari: Qui crediderit
et baptizatus fuerit, salvus erit.
Alleluja.

今日、聖書にあるように精霊降臨が
成就した。アレレヤ。
今日、精霊が炎に包まれながら
弟子たちの前に現れ、彼らに神からの
お告げを与えた。
すべての人間に行って知らせなさい。
布教し、証しなさい。神を信じ洗礼
を受けるものは救われるのだ、と。
アレレヤ。

● O JESU MI DULCISIME < Zu Weihnachten >

おお、やさしき私のイエスよ < クリスマスのために >

クリスマスのためのモテット。同じテキストで2曲書かれているが、(1597年の「サクラ・シンフォニア集」と1615年の「シンフォニア・サクラ集」に含まれている。本日演奏する曲は後に作曲されたもの。) この曲は、先のものより2群の合唱配分が均等でより情緒的要素が強い。前半の各合唱群により歌われる部分は密やかで、イエス誕生の神秘的雰囲気満ちているが、後半は三位一体を象徴する三拍子に乗って高らかに喜びを歌い上げている。

O Jesu mi dulcissime, adoro te
in stabulo commorantem.

おお、やさしき私のイエスよ、私は
厩にいますあなたを崇めます。

O puer dilectissime, adoro te
in praesepe jacentem.

おお、愛しきみどり子よ、私は
飼葉桶に眠るあなたを崇めます。

O Christe, rex piissime, adramus te
in feno cubantem in caelo fulgentem.

おお、キリスト、恩寵の王よ、私たちは、飼葉の
床にありながら天からの輝きに包まれた

O mira Dei pietas,

あなたを崇めます。

O singularis caritas!

おお慈しみ深く、はかり知れない神の恩寵!

Christus datus est a patre,
Jesus natus est

イエス・キリストは父のお力によって
聖母からお生まれになった。

O divina ergo proles, te colimus

おお、お告げによる神の子よ、私達人間は

hic homines, ut veneremur coelites.

天からの祝福の中であなたを賛美し、今ここで
あなたを崇めます。

II. H•SCHÜTZ/MAGNIFICAT SWV 468

ハインリッヒ・シュッツ/マグニフィカト SWV468

シュッツ研究家の一人であるエッゲブレヒトは、シュッツの楽風を人文主義的、プロテスタント的、そしてドイツ的であると評している。一方、シュッツの音楽が現在の我々に再現する契機となったのは、「ガブリエーリとその時代」(ヴィンターフェルト、1834年)という著作中でシュッツの作品が脚光を浴びた事実であった。

これらのことはヴェネツィア楽派の代表的作曲家であるG・ガブリエーリに師事し、イタリア的色彩のバロック初期の技法を習得したシュッツが、ドイツ音楽の基盤にその様式を移し変えていったことを意味する。

この「マグニフィカト」にもヴェネツィア楽派にみられる協奏様式と、広い空間を有効に活用する二重合唱の音響効果が十分に生かされ、壮麗な音楽を形成している。さらにこの楽曲で特徴的なことはコーロ・ファヴォリート(選ばれた合唱隊の意)と呼ばれる声楽アンサンブルが2つの合唱隊の中央に位置しソリストティックな声部を受け持つことで、コンチェルトの主要原理である音楽上のコントラストを一層明確に引き立てている。

また、管弦楽声部も個性的な生動を打出し、初期バロックポリフォニーの広次元的可能性を証明するに相応しい。テキストに呼応するメタフォリカルな音の配列も絵画的要素の外延と取れるが、時に現れる空虚な沈黙はやはりシュッツの時代・彼の人生観に裏打ちされたものと思われる。

Magnificat anima mea Dominum.

私の魂は主を崇め、

Et exultavit spiritus meus

私の霊は救い主である神を

in Deo salutarimeo.

喜びをもって讃えます。

Quia respexit humilitatem

なぜなら主ははした女の卑しきにも

ancillae suae:

目を向けてくださったからです。

Ecce enim ex hoc beatam

ご覧下さい、代々全ての子孫が今から後

medicent omnes generationes.

私を幸いなものとして讃えるでしょう。

Quia fecit mihi magna, qui potens

なぜなら、主は私に偉大なことを

est: et sanctum nomen ejus.

なさったからです。主は力あるお方で

Et misericordia ejus a progenie

その御名は神聖です。そして、

in progeniem timentibus eum.

主の憐れみは代々にわたり偉大です。

Fecit potentiam in brachio suo:

主はその腕で力を振るい、

dispersit superbos mentecordis sui.
Deposuit potentes de sede,
et exaltavit humiles.
Esurientes implevit bonis:
et divites dimisit in anes.
Suscepit Israel puerum suum,
recordatus misericordiae suae.
Sicut locutus est ad patres
nostros Abraham, et semini ejus
in saecula.
Gloria, gloria patri, gloria filio,
gloria spiritui sancto, sicut erat
in principio et nunc et semper
et in saecula saeculorum. Amen.

傲慢な者を打ち碎きます。
主は力あるものをその座から下ろし、
卑下するものを高くします。
主は飢えた者を良いもので満ちし、
富める者を空腹のまま追い出してしまうでしょう。
主は憐れみをお忘れにならず
その僕イスラエルを助けてくださいます。
我々の先祖アブラハムに語られたように、
その子孫に永遠に。

栄光あれ、父と子と聖霊とに。
はじめからそうであったように。
今もこれからも代々いつまでも
永遠に。アーメン。

III. J.S. BACH/MOTETTE

ヨハン・セバスティアン・バッハ/モテット

1789年4月23日、トマス学校カントルの要職に在ったバッハの弟子のひとりドーレスを訪ねたモーツァルトは、初めてバッハのモテット「主に向い新しき歌を歌え」を聴き、他のモテットの楽譜を眺め、自分はこのような音楽を求めていると言って感激した逸話がある。

この時にドーレスが提供したのは無伴奏のモテットであつたし、それが当時の盛行でもあつた。しかしバッハの時代には、合唱を器楽と重ね合わせるか、分担制により演奏される場合がかなりあつたと考えられる。このコッラ・バルテ奏法と呼ばれる声楽と器楽の合同演奏形態は1732年の「ザクセン教会儀式史」の記述中にも登場するが、とくに身分の高い人の追悼・追憶の説教の場合に用いられたようである。

話が前後するが適用範囲が広い「モテット」の中での「バッハのモテット」に樋口隆一(音楽学者)が与えた定義を引用しておく。

バッハのモテットとは、「二重合唱、コラール編曲、厳格な声楽フーガ等の様式によりドイツ語の歌詞をもった、宗教的多声合唱曲」といえる。

II. Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf

聖霊は弱い私達を助けてくださる

トマス学校の教授であり校長でもあつたエルネステイの葬儀に際して作曲された。

三部分から成り、第一部ではヴェネツィア楽派からの伝統である2つのコーラスのホモフォニックな和声の受け渡しと強弱の対比がより流麗な形として示される。第2部は四声の二重フーガであり、2つの主題は曲の最後で有機的に結合される。第3部はルターの聖霊降臨節用コラール「来たれ、聖霊よ」第三節に基づくコラールで節度ある装飾により美しく力強くしめくられる。

Der Geist hilft unsrer
Schwachheit auf,
denn wir wissen nicht, was wir
beten sollen, wie sich gebühret,
sondern der Geist selbst
vertritt uns aufs beste
mit unaussprechlichen Seufzen.
Der aber die Herzen forschet,
der weiß, was des Geistes Sinn
sei, denn er vertritt
die Heiligen, nach dem es
Gott gefällt.
(Choral)
Du heilige Brunst, süßer Trost,
nun hilf uns fröhlich und

聖霊は弱い私達を助けてくださる。
なぜなら、私達は
どう祈ったらよいか分からないが、
聖霊自ら言葉に表わせない
切なるうめきをもって、私達のために
取りなしてくさるからである。
そして人の心を探り知る方は、聖霊の
思うところが何であるのかを知って
おられる。なぜなら、聖霊は
聖徒たちのために、神の御旨に
かなうとりなしをしてくださるからである。
(コラール)
聖なる情熱、快い慰めである聖霊よ。
今すぐ私達を喜びと安らぎのうちに

getrost in deinem Dienst
beständig bleiben,
O Herr, durch dein' Kraft
uns bereit und stärk
des Fleisches Blödigkeit,
das wir hier ritterlich ringen,
durch Tod und Leben zu dir
dringen. Halleluja !

いつまでも変わることなくあなたの
御旨にかなう者とならせてください。
おお、主よ、あなたのお力によって
私達がおろかなる肉の誘惑と
りしく戦い、死せる時も生きる時も
あなたのもとへ進んでいきますように、
私達を導き、そして強めてください。
ハレルヤ。

V. Komm, Jesu, komm.

来てください、イエスよ

P. テューミヒがトマス学校のある校長の埋葬用にしたアリアの第一節を歌詞としている。2つの節から成り、第1節は歌詞の内容を音楽上の自然な力学関係によって見事に描き、またフガート風な部分、メヌエット的な優美さを堪える部分等、壮大な構想を背景としながらも切れ目なく続けられていく。第2節は第1節とは対照的な4声体コーラル楽節によるアリアである。定旋律がなく、統合されたコーラスは各々の道を形造りながら汝(神)に身を委ねてゆく。

Komm, Jesu, mein Leib ist
müde, die Kraft verschwind't
je mehr und mehr,
ich sehne mich nach deinem
Frieden; der saure Weg wird
mir zu schwer !
Komm, ich will mich dir ergeben,
du bist der rechte Weg,
die Wahrheit und das Leben.
(Aria)
Drauf schließ ich mich
in deine Hände und sage,
Welt, zu guter Nacht !
eilt gleich mein Lebenslauf
zu Ende, ist doch der Geist
wohl angebracht.
Er soll bei seinem Schöpfer
schweben, weil Jesus ist und
bleibt der wahre Weg zum Leben

来てください、イエスよ。
私の体は疲れ、私の力は
いよいよ消え失せていきます。
私はあなたの平安を求め続けて
いますが、その苦難の道は私に
とってはあまりの重荷となるでしょう。
来てください、私はあなたの忠実な僕です。
あなたは正しい道であり、
真理であり、生命です。
(アリア)
私は主の腕にあってこの世に
お別れを言います。
私の生涯はもうすぐ終わります。
聖霊は神の御心に
かなっています。
聖霊は神のおそばまで通じています。
なぜならイエスは生命へと至る本当の
道であり、また本当の道で
ありつづけるからです。

●合唱団の歴史

1977年2月27日	「カンタータを歌う会」として発足	
6月28日	「盛岡バッハ・カンタータ・フェライン」に改称	
1978年2月26日	「バッハコンツェルト」カンタータ第45番、芸大と共演	指揮 小林 道 夫
1979年10月6日	「BACH ABEND」カンタータ第158・131番	指揮 小林 道 夫
1980年2月27日	「バッハのタベ」カンタータ第80番、芸大と共演	指揮 小林 道 夫
1981年7月4日	「BACH ABEND」カンタータ第196番・182番	指揮 小林 道 夫
1982年11月22日	「バッハのタベ」カンタータ第158・4番	指揮 佐々木正利
1985年3月16・17日	J.S.バッハ生誕300年記念演奏会「ヨハネ受難曲」 (仙台宗教音楽合唱団と合同演奏)	指揮 佐々木正利
1985年11月3日	仙台北教会宗教音楽のタベ「メサイア」	指揮 佐々木正利
1985年11月29日	G.F.ヘンデル生誕300年記念演奏会「メサイア」	指揮 佐々木正利
1986年4月11日	「宗教音楽のタベ」シュツ「ドイツ・レクイエム」バッハ「モテット1番」他	指揮 佐々木正利
1986年4～5月	第1回西ドイツ演奏旅行	指揮 佐々木正利
1986年7月11日	「東京ゾリステン演奏会」共演、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」	指揮 赤 松 安
1987年3月28日	創立10周年記念演奏会「カンタータのタベ」	指揮 佐々木正利
1988年3月12・13日	仙台宗教音楽合唱団(創立20周年)との合同演奏会「ミサ曲口短調」	指揮 佐々木正利
この他、クリスマスチャリティコンサート、チャペルコンサート、合唱祭等に出演。		

●団員紹介 (★仙台宗教音楽合唱団)

●ソプラノⅠ

遠 藤 澄 江	小 原 育 世	菊 池 節 子	沢 田 東 子	吉田真由美
泉山真貴子	佐 藤 千 砂	袋 井 雪 子	伊 藤 香 織	菅 村 雅 子
福 田 温 子	渡辺栄美子	井 上 育 子	高 橋 由 華	古 内 敬 子
泉 山 尚 子	★鈴木江美	★相沢徳子		

●ソプラノⅡ

小 川 牧 子	久保木万喜子	齊 藤 純 子	滝沢真紀子	平 野 陽 子
柳 田 松 子	矢 幅 嘉 子	門脇たたえ	中 村 澄 江	金子亜紀子
坂巻奈美恵	新 沼 理 恵	猪 俣 道 子	横 山 理 香	

●アルトⅠ

兼田紀美子	吉川由美子	桐 原 絹 子	昆 玲 子	早川美美子
堀 切 千 鶴	Evelyn Olson	村 田 純 子	長 沢 雅 子	小 川 暁 美
菊地美樹子	佐々木久子	中 野 晶 子	★井上紘子	

●アルトⅡ

阿 部 怜 子	小 野 成 美	平 賀 尚 子	佐々木美智子	鳴海真希子
井上未由子	佐々木志保子	中田真佐子	鈴 木 千 秋	

●テノールⅠ

竹 田 光 宏	柴 内 宏 光	中 野 寛 司	城 戸 了	★松原信行
---------	---------	---------	-------	-------

●テノールⅡ

太 田 穎 則	佐々木幹雄	田 村 昭	遠 藤 康 成	阿 部 実
織 田 靖 夫	★加 藤 進 也			

●バスⅠ

泉 悟	稲 辺 督	小 原 一 穂	木 村 吉 彦	三 嶋 豊
杉 井 智 一	★佐 藤 清 陽			

●バスⅡ

安 倍 勝	稲 葉 正 俊	佐 藤 英 靖	下 田 潤	佐々木義幸
武 田 宏 之				

● 団員募集



盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、主としてバッハの教会カンタータを演奏する事を目的として結成され、今年で12年目を迎えます。これまで、バッハの教会カンタータを中心とした演奏会を多数開催、西ドイツでの演奏旅行も行ないました。只今、会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルは問いません。合唱が好き、音楽が好き、という方、大歓迎！ 私達と一緒に歌いましょう。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味にあふれ、時を越えて私達の心に語りかけてきます。

どうぞお気軽に練習会場においで下さい。

●練習日 毎週火曜日 PM6:30～9:00

●会場 カトリック志家教会礼拝堂

●練習曲目 J. S. バッハ作曲
「クリスマスオラトリオ」他

●連絡先 木村吉彦 ☎41-1507

1990.3.11。

来年もまた
この場所で
会いしま
しょう。

